アン・ビーティ

燃える家

THE BURNING HOUSE

訳

亀井よし子

燃える家
1989年3月25日　初版第一刷発行
1989年4月15日　第二刷発行
定価　1648円(1600円＋税48円)
0097-890110-7417
著　者　アン・ビーティ
訳　者　亀井よし子
発行者　目黒　実
編集者　若月眞知子
　　野中桃子
装本者　吉村二郎
発行所　㈱ブロンズ新社
　　東京都港区南青山4-26-6-102
　　03-498-3272
印刷所　三秀舎／小宮山印刷
製本所　東京美術紙工
©1989 Yoshiko Kamei
Ann Beattie: The Burning House

燃える家

THE BURNING HOUSE

アン・ビーティ

訳 亀井よし子

The Burning House
©1983 by Ann Beattie
Japanese Translation rights arranged
with Rogers, Coleridge & White Ltd.
through English Agency Japan Ltd.
Published in Japan by Bronze Publishing Inc.

再びデイヴィッドに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

身をゆだねて　7

浮　遊　27

プレイバック　37

シンデレラ・ワルツ　57

女同士の話　91

重　力　107

欲　望　119

ハッピー　137

いさり火 153

光と影 165

待　つ 179

駆けめぐる夢 199

ガラスのように 217

グリニッチ・タイム 227

燃える家 247

訳者あとがき 275

カバー絵

"A BIGGER SPLASH"

©David Hockney 1967

装丁

吉村二郎

Learning to Fall

身をゆだねて

ルースの家、早朝。食卓にはリンゴの入ったボウル。チェックのテーブルクロスにパンくず。
「愛してるわ」とルースがアンドリューにいう。「あなたを愛してるのよ、知ってた？」
「知ってるよ」とアンドリュー。母親がわたしの前でめめしいことをいうので、いらだっている。もう子供じゃないというところを見せたくてたまらないのだ。起きたばかりでご機嫌もよくない。わたしも機嫌がよくない。寒い中、車を飛ばしてルースのところまでやってきたというのに、まだわたしは目を覚まそうと、コーヒーを飲んでいる。こんなときに誰かに、愛している、などといわれても、とても信じられないだろう。朝のこんな早い時間にものごとを素直に考えられるはずがない。他人と話をするのもいやだし、長くて寒い冬にも腹が立っている。アンドリューとわたしはルースのテーブルに坐り、そろってしかめっ面をしている。ルースはそんなわたしたちを、いつものように、寛容の目で見ている。
「コーヒーのおかわりは？」とルースがいう。わたしはこくんとうなずいて、注いでもらう。自分で席を立ち、ガス台まで行ってポットを持ってくるくらい、何でもないことなのに。
「髪でもとかしたらどうなの」ルースがアンドリューにいう。アンドリューは立ち上がり、部屋を

出ていくと、ルースの木のブラシを持って戻ってきて、髪をとかしはじめる。「テーブルの上でとくのはやめてね」とルース。

アンドリューはもうとき終わっている。ブラシをテーブルに置き、わたしに目を向ける。「電車に遅れちゃうよ」

「時間はたっぷりあるわ」とルース。アンドリューは時計に目をやり、大きなため息をつく。ルースが笑う。彼女は蓋の開いた蜂蜜のビンの口をぐるりと指でぬぐい、その指をなめる。

「さあ」とわたしがアンドリューにいう。「あなたのいうとおりだわ。遅れるより早いほうがいいわよね」そしてルースに声をかける。「何か欲しいものある?」たとえ欲しいものがあったところで、彼女はいわないだろう。彼女は人からものをもらうのが好きではない。お返しを買う金がないからである。それに、彼女は身の周りにものがたくさんあるのを好まない。キッチンにも、テーブルがひとつに椅子が四脚だけ。もとから家についていた家具しか、持っていない。

「ううん。でも、ありがとう。気持ちだけいただいとくわ」といって、ルースはラジオを消す。

わたしたちが戸口を出るとき、ルースがもう一度いう。「ありがとう」彼女はアンドリューとわたしの背中に手を置く。わたしはドアを開ける。寒気がどっと流れ込む。

月に一度か二度、水曜日に、アンドリューとわたしはコネティカットからニューヨークに行く電車に乗る。通りをぶらぶらしたり、店をのぞいたり、美術館をめぐったり、彼の小さな手をとってわたしは歩き回る。その手は木のこぶのように固く握りしめられている。彼には同じとしごろの友

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

人がいない。だが、わたしのことは好いてくれている。八年のつき合いで信用してくれているのだ。

彼はきょう、スーパーマンの膝当てのついたブルージーンズをはいている。もしスーパーマンが彼の膝から飛び出したら、地上三十センチそこそこのところを飛ぶことになるだろう。周囲の人は青い服を着たその小さな姿を見て、風に舞い上がったごみか、吹き飛ばされた棒切れかと思って、裾を押さえることだろう。

「またおなかが空いちゃった」とアンドリューがいう。

彼はわたしが日中は食事をとらないことを知っている。彼が、また、といったのは、家を出る前にオートミールを食べ、十時にはウェストポートの駅の向かいにあるファストフード店でペストリーを食べて、いまはまだ十二時、次の食事には早すぎるし、わたしが「また？」と聞き返すことを知っているからである。

アンドリュー。彼が生まれた日の朝――生まれたのは夜だった――ルースとわたしは学生会館の池で泳いだ。いまにも生まれそうな身重のからだでも浮くことができて、ルースは喜んでいた。彼女は妊娠しているのが嬉しくて、子供を欲しがってもいた。子供の父親は、中絶してくれるよう乞い願ったあげく、アンドリューが生まれる六カ月前に姿をくらましてしまったのだけれど。

わたしたちが学生会館の池で泳いだ最後の日、もう予定日を二週間も過ぎていた。陣痛の起きる気配はまだなかったが、彼女の緊張ぶりと頭上を照りつける熱い太陽のおかげで、わたしは冷たすぎる水の中に立っていてめまいを覚えた。

そしてその夜、彼女の手を握っていたわたしの手は、上へ上へと這っていき、ついには彼女の腕

をつかんでいた。そうしていないと、彼女がするりと抜け出していくような気がした。「手を握って」と彼女はいい続けた。わたしは親指で彼女の手の関節をこすり、渾身の力を込めてその手を握りしめた。だが、どうしても手首を、それから腕の中ほどをつかみ、肘にしがみつくというのをやめられなかった。まるで彼女が溺れているとでもいうように。それから数年後、恋人になった男にもわたしは同じことをするようになった。だが、今度は溺れているのはわたしのほうだった。

アンドリューとわたしはグッゲンハイム美術館の中のスロープを下りていく。わたしはレイのことを考えている。アンドリューもわたしも絵を見てはいない。この美術館でアンドリューが気に入っているのは、コインの散らばった青い人工池を見下ろす眺めなのだ。

カーブした通路でわたしは彼の横に立つ。「ここからコインを投げちゃだめよ、アンドリュー」とわたし。「誰かに当たるかもしれないから」

「一セントだけ」といって、アンドリューがコインを出して見せる。確かに一セント硬貨だ。嘘ではない。

「いけません。誰かの顔にでも当たったらどうするの。そんなもの投げて、人に怪我をさせるかもしれないわ」

わたしは、人を傷つけないように気をつけて、と彼に頼んでいる。彼が生まれるとき、なかなか出てこないのに業を煮やした医師が、鉗子を使って引きずり出した。そのため、脳に軽度の障害が起きた。それに、顔に少し麻痺が残った。口もとに。

アンドリューが一セント貨をポケットにしまう。パーカの肩が片方ずり落ちているが、気づいていない。

「お昼にしましょ」とわたし。「コインを投げるのは下に行ってからにしてね」

彼はわたしより先に池に着く。見下ろすと、願いごとをしている姿が見える。何を願うべきなのか、まだ彼は知るまい。人々はコインを投げている。アンドリューは恥ずかしがって、ただそこに立っているだけだ。目を閉じ、ときおり横目で様子をうかがっている。手には一セント硬貨がしっかりと握られている。彼は自分が何かするとき、人に見られたくないのだ。この世に他人というものが存在することへの失望の表情が見える。彼は腕を飛行機の翼のように広げて走るのが好きだし、列車の客室の最初の席に坐るのが好きだ。それも二人掛けの席に向き合う三人掛けの席に、わたしと二人きりで坐るのが好きなのだ。脚を伸ばすのが好きだし、煙草のけむりと香水のかおりは大嫌いだ。春になると、彼はコニャックのかおりをきく老人のように、風のかおりをかぐ。

彼はいま小学校の三年生。これまでのところ、ついていくのがほんの少し難しいだけだ。彼の担任――いまではルースの友だちでもある――は若くて前途有望、アンドリューがほんとうはわたしとニューヨークに出かけたのに、病気でした、とルースが嘘の欠席届を書いても、うるさいことはいわない。アンドリューが一緒だとニューヨークに行くのも楽しくなる。だからこそ、そしてもうひとつ、わたしが彼をよく知っていて、かわいそうに思っているからこそ、わたしはほとんど彼を愛している。

わたしたちはハンバーガーを食べようと、アンドリューのお気に入りの店に行く。正面にテーブ

ルが二つある、マディソン街の小さな店である。わたしたちがテーブル席に坐ったのは、レイと会ったとき一回きりだ。アンドリューはテーブル席に坐るのを喜んだが、恥ずかしがって、あまり話をしなかった。レイが一緒だったからだ。カウンターの奥の男はわたしたちを知っている。いまも、声こそかけてはこないが、気づいているはずだ。わたしたちはいつも同じものを注文する。わたしはブラックコーヒー（世界最高と広告されている）、アンドリューはベーコン・チーズバーガーとミルク。ルースにお行儀よくなさいと教えられているので、彼はひと口飲むたびに口の周りに円くついたミルクを拭う。ミルクで湿ったナプキンのせいで、彼の手はべたべたになる。

きょうはひどく寒い。そしていまわたしはあの遠い暑い夏を思い出している。あれから八年、ほとんど泳いだことがない。アーサーとわたしが州の南部に移り、学生会館の池に遠くなってからは一度も泳いでいない。

ルースと一緒に大学院へ行っていたころ、わたしたちはよく学生会館の池に勉強しにいった。彼女はいつも大きくてぶ厚いロシアの小説を持っていくので、水の中に落とすのではないかと、わたしはいつも心配していた。あんな大きな本を、しかもアンダーラインや書き込みがいっぱいの本を失くしてしまったら、悲劇どころではすまなかっただろう。ルースはけっしてそんなへまはしなかった。わたしは金の鎖（本物の）とライターをなくした。わたしの本にはさんであった食料品買い出しリストが水に落ちたこともあった。水底に沈むにつれて、リストの文字はにじみ、ぼやけ、消えていった。わたしたちはほかの人より早い時間にそこへ行った。そのころ、その池を知っている人がそれほど多かったというわけではないが。おかげでいつも大きな石に坐ることができた。やが

てほかの人がやってきて、小さな石に腰を下ろしたり、水面に延びた突堤に立ったりするのだった。中には素裸で泳ぐ人もいた。

あるときゴールデン・レトリヴァーがわたしたちの石に跳び上がり、後肢を折って坐って上を向き、空に向かって吠えたかと思うと、やおら立ち上がって駆足で森を抜けていった。水際の濡れた泥のせいで足の裏が黒くなっていた。ルースはその出来事にひどく興奮して詩を書いた。その詩には例の犬が、警告を与えるものとして登場した。天使ではなく犬が、である。わたしはその詩をじっと見つめた。よく意味がわからなかったのだ。「滑稽詩のつもりなの」とルースはいった。犬が走り去ったとき、ルースは両手で口を覆っていた。次の夏、わたしがアーサーと結婚したとき、彼女はわたしの手にしたブーケをテーマに詩を書いた。ブーケにはつぼみのユリが数本あったが、それが、キャンドルのようだ、と。しかも彼女の目には、ローマン・キャンドルという、筒型をした花火のように大きく見えたのだ。まるでわたしのブーケが爆発し、シャワーのように降りかかってくるとでもいうように。わたしはその詩を読んで笑ったが、それは間違っていた。アーサーとのあいだがぎごちなくなったいまでは、あれは予言詩だったといえる。

「どうかしたの？」といって、アンドリューがチーズバーガーを置く。彼はいつも同じやり方でチーズバーガーを食べる。外側だけをぐるりと円くかじって、まん中を残すのだ。ほかにそんな食べ方をする子供をわたしは知らない。

わたしは腕時計を見る。アーサーからのクリスマス・プレゼントの時計である。エッグカップとかデジタル時計とかいった、なんとも味気ないプレゼントをわたしにくれて平気なのには、まった

く恐れいる。時刻を見るためには、横についている小さなボタンを押さなくてはならない。押さえているあいだは時刻が表示され、数字が変わっていくが、手を離せば時計の表面は、のっぺらぼうの赤一色に戻ってしまう。

「ボニーのスタジオに行くのよ。ルースが頼んだ写真をプリントしてくれたの。独立記念日に撮ったあの写真よ。やっと見られるのよ」

わたしはポケットを探り、ボニーに払ってほしい、とルースから渡された小切手にさわる。

「ボニーのスタジオって？」とアンドリュー。

「スプリング通りよ。お母さんのお友だちで、髪の毛が長くて腰まである人、憶えてるでしょ。ボニーの家がどこか、知ってるじゃない。前に一回行ったことがあるもの」

わたしたちは地下鉄に乗る。車両は混み合っていて、アンドリューは、わたしの隣にからだをねじこんで、やっと坐る。お尻を半分しか座席につけられず、左脚はわたしの膝の上に投げ出されている。まるで腹話術師と人形のように見えることだろう。彼の隣に坐った黒人女性が少しずれてくれたが、アンドリューはわたしにくっついたまま動こうとしない。

「もしボニーがお昼ごはんをどうぞっていったら、あなた、きっとまた食べるわね」といって、わたしは彼のパーカの脇をつつく。

「もう食べられないよ」

「あなたが？」

「やせっぽちだもん」とわたしにいって、彼はふわっとしたパーカを叩く。パーカを脱げば、Tシ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com